岩井歯科クリニックかわら版

No.4　　2012.11.

ご挨拶

時雨模様に時折のぞくお日さまが嬉しい季節となってきました。皆様いかがお過ごしでしょうか？向寒の折、くれぐれもご健康にはお気をつけ下さいますようお祈り申し上げます。

命を支える･･･

今年の10月はiPS細胞を作製された山中伸弥京都大教授にノーベル医学･生理学賞が授与され、日本中が元気づけられました。この発明により、今後医療の現場で恩恵を受ける患者さんも増えてくることでしょう。

このように科学や医療技術はめざましい発展を遂げていますが、患者さんが過剰な期待を持ち過ぎる感もあります。「もう何年かすると、病気で治せないものは無くなるのではないか。」等と思ったことはありませんか？

しかし、実際の現場においては昔と比べ病気が益々増え、国民の総医療費は一向に下がる気配がありません。介護保険も同様です。

歯科医療の面でも（特に日本の）「入れ歯」治療は、とてもほめられた状態ではありません。某歯科大学の補綴学（入れ歯専門）の元教授は、「1961年制定の国民皆保険制度が導入された時から、50年以上経った現在まで、入れ歯治療に進歩がみられない」と嘆いておられました。現在の保険制度ではコストがとても低く抑えられ採算が取れない、治療時間も短い等の理由で、良い「入れ歯」を作ることはとても難しいのです。そのため、「これ以上入れ歯を治せないから、よその病院へ行って下さい。」「軟らかい物を食べて、入れ歯に慣れるようにして下さい。」「入れ歯は作っていません。」等と言われ、我慢している方が実に多いのです。また、介護施設でも「いざ食事となると、一斉に入れ歯を外して食事をなさっている」という話もよく聞きます。「生きることは食べること」人の尊厳に関わることです。咀嚼機能を回復することは、患者さんを真に自立させる大切な要素であり、良い「入れ歯」を入れることで叶うもの、ひいては医療費の抑制にもつながるものと思います。

それでは、本当に良い「入れ歯」を作るにはどうしたらよいのでしょうか。医療者側が最高の技術を提供でき、患者さん側も最善の治療を受けられる環境：「保険制度からの脱却」を相互理解し合わなければならない時代になってきていると、私は考えています。

先日、「10日後にお祭りがあるのですが、歯が抜けてしまい、横笛を吹けなくて大変困っています。」という患者さんがご来院されました。かなり前に他院で作製された入れ歯をご持参なさって、恐縮されています。お口の中を拝見すると、通常ならとても間に合いそうにない感じです。お断りしようかとも思いましたが、この患者さんは祭りで横笛が吹ける唯一の方で、地域の皆様もお困りとのこと。私の歯科医魂を刺激され、自身が技工作業をしていることもあり、かなり無理をして1週間で「入れ歯」の大改造・修理をしてお渡しすることができました。後日、患者さんから「笛が吹けて、祭りも滞りなく無事に終了しました。皆喜んでいました。私も数年ぶりに美味しくご飯が食べられるようになって、本当に良かったです。ありがとうございました。」とお言葉をいただいた時、「入れ歯」作りにこだわってきた甲斐があったと感じた一瞬でした。

左：称名滝（谷崎様ご提供）
中央：五箇山（相倉集落）
右：晩秋の実家庭園

（このニュースレターに関する皆様からのご意見・ご感想などをお寄せいただければ幸いです。）